

疫病と横浜

[illegible]

『疫病と横浜』

書経に曰く「万物の霊長」とされる人類。神々として何より同族を除いては、まるで敵無しが如くに振る舞う我々だが、実は恐ろしい天敵から今日も狙われ続けている。それは、恐ろしい牙や爪をもって襲い掛かる猛獣ではない。目に見えないほどの微小な存在、感染症を引き起こす細菌やウイルスである。感染症と人類の戦いは、有史以前より繰り広げられてきた。人類の歴史とは、感染症との戦いの記録といっても決して過言ではない。それは、この我が国にとっても同じである。

当宮は、伊勢の神宮の御分霊と伝承されるが、伊勢の神宮の創建もまた、感染症（疫病）が関わっている。第十代崇神天皇の御代に、疫病によって国民



災ひより
立ち上がらむと
する人に
若きらの力
希望もたらす
皇后陛下御歌



創建150年記念事業「植樹」
みなとみらい象の鼻パーク



植樹の儀（土掛け）



植樹式奉告祭

の半数が失われるという惨事に見舞われた。それまで天照皇大神の御霊代（みたましろ）たる八咫鏡は、皇居内において祀られていたが、これを機に神威を畏んで宮中から遷された。後に倭姫命によって伊勢の地へ遷され、神宮が創建されたのである。古代から近代に至るまで、疫病はしばしば神威あるいは御霊（ごりょう）※怨みを遺した霊）によるものと捉えられたのであった。

さて、この国土を襲った疫病の中でも、特に猛威を振るったのは、海外より侵入したものであった。奈良時代からの天然痘、江戸時代からのコレラが代表格となるが、これらはいずれも九州地方から侵入したものである。我が国は、古代から近世の鎖国時代に至るまで、九州の北部が海外との交流の扉であった。

しかし、黒船によって泰平の眠りから覚めると、そこに新たな扉が開かれる。それこそが、この横浜の地であった。

幕末から明治まで世界規模でコレラの流行が度々発生した。そして横浜がその侵入口となることは、決して珍しいことではなかった。伊勢山皇大神宮は、横浜そして横浜港の鎮守として創建されたが、そこには海外から侵入する悪しきものを防ぎ、横浜をひいては日本を守るという人々の願いが込められている。この悪しきものの筆頭とは、やはり感染症であった。

横浜の地は、明治の初めから海外より侵入する感染症と果敢に戦ってきた。衛生状況を改善する為に、全国に先駆けて近代的な上水道と下水道を完成させた。当時最新鋭の医療技術を誇る十全病院（現・横



創建 150 年記念事業「植樹」
中区本町小学校



生徒たちも参加



植樹の儀（土掛け）



創建 150 年記念事業「植樹」
みなとみらい象の鼻パーク



記念写真



植樹の儀（水撒き）

横浜市立大学付属病院）が野毛に設立された。船舶の検疫の為に、長浦消毒所（現・横浜検疫所）が開所された。このようにして横浜は感染症を克服し、国際港都としての繁栄を守ってきたのである。

時は流れて、令和二年。今回の新型コロナウイルス感染症の国内における幕開けは、残念ながら横浜港に入港した「ダイヤモンド・プリンセス号」であった。この豪華客船は、当初まるで新型コロナウイルスであるかのように扱われ、横浜が世界中から謂れのない中傷を浴びたのは、真に遺憾なことである。

去る十一月二日、母港横浜で長らくその羽を休めていた「飛鳥II」が、新たな旅路へと出発した。この出航は、未だコロナ禍の中にあれど、懸命に動き出した横浜の今の姿を映すかのようにも感じる。

「飛鳥II」の停泊期間中、伊勢山皇大神宮の恒例

の祭典のさなか、しばしばその汽笛が轟くことがあった。横浜の町へ、伊勢山の丘へ、誇らしげで力強い船の汽笛が轟くとき、やはり総鎮守たる天照皇大神のおかげと、横浜の歴史を思い起こす。そして大神の導きの下に、必ずやこの未曾有の困難をも克服するであろうことを、確信するのである。

来年の五月十五日には、延期されていた当宮創建百五十年の奉祝大祭が、改めて斎行される。神前に満ち満ちる市民の慶びの声は、疫病の影を払い去り、そして国際港都横浜の新たな船出の汽笛となり、海風に乗り響き渡ることだろう。



創建150年記念事業「植樹」 ここまでの実施と予定

- 令和2年3月12日 野毛山公園
- 令和2年10月17日 象の鼻パーク
- 令和2年11月26日 本町小学校
- 令和3年4月5日 伊勢山皇大神宮



野毛山公園（西区老松町）
「ソメイヨシノ」



象の鼻パーク（中区海岸通り）
「寒山里桜」



本町小学校（中区花咲町）
「ソメイヨシノ」

創建 150 年記念事業

流鏝馬

令和3年5月16日(日)

みなとみらい臨港パーク

